



城

第七十一回

みき
三木城

～二大勢力に挟まれた悲しき別所氏～

山本 忠博

今回ご紹介する三木城は、かつては播磨の国と呼ばれた、現在の兵庫県三木市に在った平山城です。この城は、戦国史において必ず出てくる三木合戦の舞台になった所として超有名です。この合戦は、第69回の石山本願寺、第29回の月山富田城のその2で触れた上月城、第39回の有岡城での戦いと密接に関連して行われたものですから、これらの回を今回と合わせて読み直してみると、当時の情勢が俯瞰的に見えてくると思います。

まずは室町期から戦国期中期頃までの播磨の情勢

播磨の国（現在の兵庫県西南部）は、室町期の前期においては有力守護大名の赤松氏の領国でした。しかし、赤松氏が室町幕府の6代将軍を暗殺する事件を起こしたことから、幕府に討伐され、その力が著しく衰えました。その後、戦国期の初期に、播磨における赤松氏の勢力の回復も見られましたが、それ以降はまたもその減退が著しく、没落の一途をたどりました。

赤松氏に変わって播磨で勢力を伸ばしたのは、その家臣や支族達でした。戦国期中期以降はそれらの中小勢力が群雄割拠する状態で、播磨はまとまりを欠いたまま、東の織田氏と西の毛利氏に挟まれることになります。

別所氏と三木城

そんな播磨の東で勢力を維持していたのが別所氏です。別所氏は、もともと赤松氏の庶流とされ、赤松氏の献身的かつ有力な家臣でした。上述の赤松氏の勢力の回復に尽力したのが別所氏で、その際に得た所領に築いたのが三木城でした。

しかし、別所氏は、戦国期の赤松氏の凋落を見るに至って、戦国大名化して独立していたのでした。

そして、戦国期も終盤にさしかかる1568年に、織田信長が上洛を果たして畿内（京都の周辺地域）に勢力を伸ばすと、畿内に隣接する東播磨の別所氏は、信長に服従しました。

1570年に若くして当主に立った別所長治は、1575年に信長に謁見し、その後も信長の陣に援兵を送ったりしています。

戦国期の後期の播磨周辺的情勢

信長が上洛してからの当面の目標は、畿内の完全掌握でした。その為には、畿内から追い出した勢力との戦いを続ける必要がありました。この追い出した勢力の根拠地が四国の北東部で、その勢力範囲が瀬戸内の東側でしたから、信長は、上記勢力への牽制のために、瀬戸内の西に勢力を張る毛利氏とは協調する姿勢をとっていました。そのため、織田氏と毛利氏に挟まれた播磨は、両氏の緩衝地帯となりました。播磨の諸勢力は、両氏の顔色を見ながら、右往左往することになります。

信長は、その間に、畿内の諸勢力に対して服従を求めて圧力をかけました。それに反発した石山本願寺が信長に戦いを挑んだのが1570年のことでした（第69回参照）。

信長と毛利氏の対決

信長は、西の毛利氏と表向きは友好的に振る舞いつつ、裏では毛利氏に敵対する勢力（尼子再興軍：第29回参照）に支援をほのめかし、また、播磨の諸勢力の幾つかを取り込みました。

これに対して、毛利氏としては、緩衝地帯だった播磨が、信長の勢力範囲となってしまうことを危惧し、また石山本願寺が落ちて信長の勢力が更に強大化することに危機感を覚えていました。そこで、それまでの信長に対する友好的な態度を改め、信長との対決姿勢をとることになります。まずは、石山本願寺の要請に応じて、1576年に信長の水軍を叩いて（第一次木津川口の戦い）、同寺に兵糧と弾薬を運び込みました（第69回参照）。

羽柴秀吉による中国攻めの開始

毛利氏の対決姿勢に対して、信長は、配下の羽柴秀吉に毛利氏の根拠地である中国地方の攻略を命じました。秀吉がその手始めに播磨の攻略を始めたのが1577年です。秀吉は、東播磨の諸勢力を説得工作で配下に収め、西播磨の上月城は力攻めで落として（第29回参照）、極めて短期間のうちに播磨を制圧しました。

これに対して毛利氏も積極策に出て、1578年に大軍を起こして、播磨侵攻の構えを見せました。

別所長治の離反

毛利氏の大軍が西播磨に迫る中、突如として東播磨で動きがありました。三木城の別所長治が信長に反旗を翻したのです。

長治の離反の理由には諸説あります。秀吉との軍議で意見が合わなかった叔父の説得があったためだとか、信長に良い様に使い捨てられる不安があったためだとか、毛利氏による説得工作が成功したためだとか言われています。

長治の離反に際しては、播磨や隣国の多くの勢力が同調していますので、おそらく、事前に何らかの示し合わせがあったのでしょう。西播磨に毛利氏の大軍が迫り、畿内では石山本願寺が信長と戦い続けている状況を見て、毛利氏が有利と見たのかもしれませんが。

そして、長治の離反に対処するべく、秀吉の救援のために播磨に入っていた信長配下の荒木村重も、戦線を離脱して畿内に戻った後に、信長に反旗を翻しています（第39回参照）。

三木の干殺し

三木城には、東播磨から集まった非戦闘員を多く含む約7,500人の人々が立てこもりました。さらに、三木城の周りには、同調勢力としての多くの支城がありました。籠城側としては、これらの人々のための食料の確保が、最大課題になりました。

秀吉は、西播磨の上月城の状況を気にしつつも、信長から三木城の攻略を厳命されたため、上月城の救援を諦めて、三木城の包囲を優先させました（第29回参照）。

籠城戦が始まった頃は毛利方が瀬戸内の制海権を握っていたため、三木城への兵糧等の運び込みは、海沿いの支城を使って海上ルートで行うことが可能でした。しかし、秀吉とその援軍が、三木城の周りの支城を各個撃破で落としつつ、三木城の周囲に40箇所とも言われる多くの付城（攻城側が築く急造の防衛陣地）を築いて包囲を固め、城の補給ルートを断ちました。

そんな折りに、上述の荒木村重が、毛利氏と石山本願寺に通じて畿内の自身の居城の有岡城に立てこもって信長に反旗を翻しました（第39回参照）。村重の勢力範囲は三木城に近いので、これで村重方からの補給ルートが確保されたことになります。

しかし、村重の謀反から間もなくして石山本願寺の近くで行われた、毛利水軍と織田水軍との海戦（第二次木津川口の戦い：第69回参照）は、織田方の勝利に終わり、その結果、形勢は織田方に大きく傾くこととなります。

三木城の籠城軍は、一応の補給ルートは残っていたものの、このままではいずれ兵糧が尽きることを危惧して、1579年になってから城の外に打って出ました。しかし、

これを秀吉に撃退されてしまいます。その後、村重方からの補給ルートは秀吉によって断たれました。さらに、籠城軍と毛利軍が示し合わせて内外から兵を進めて兵糧を運び込む作戦を実行しますが、それも秀吉に阻止されました。そして、事態は、籠城側に不利な状況にどんどん進んでいきます。西播磨の上月城の付近を領していた毛利方の武将が織田側に寝返ったために、毛利氏の直接的な救援が不可能となり、さらには、村重の有岡城が落ちてしまいます。1580年になっても籠城は続きましたが、城内の兵糧は既に尽きており、千人単位の餓死者を出し、後世に「三木の干殺し」と呼ばれる惨状を呈していました。

城内に惨状が広がり、周囲の同調勢力が潰れて救援の見込みのなくなった状況に、別所長治も覚悟を決めます。秀吉側の条件を呑んで開城することにしたのです。その条件とは、長治の一族の自害をもって城兵の命を救うというものでした。長治は、秀吉からの贈物で宴を催し、一族とともに自害をして果てました。享年は23とも26とも伝わります。辞世の句は、「今はただうらみもあらず 諸人のいのちにかはる 我身とおもへば」です。

ところで、城兵達はどうなったのかというと、一般には長治のおかげで助命されたと言われており、それであれば美談で終わるのですが（これは、秀吉を賛美するためにねつ造された可能性あり）、当時の資料では皆殺しにされたというものも残っており（これは、秀吉の戦果の誇張の可能性あり）、真実は不明です。

三木城のその後と今

落城後は、秀吉の配下の武将が入り、後に秀吉の直轄となります。江戸期の初頭には、姫路藩の支城となり、その後、1615年の一国一城令で廃城となりました。

現在では宅地化が進んで確認できる遺構が少ないですが、本丸が上の丸公園として残り、二の丸に歴史資料館があります。そして、三木城に関係するものとして、三木城を取り囲む付城群の遺構があります。かつて東西6km、南北5kmの範囲に40ほどの付城があったとされ、今でも20ほど残っています。織田軍による徹底した包囲網があったことが解る、貴重な遺構です。



三木城本丸跡

(出典：三木市立みき歴史資料館「三木城跡」、三木市ホームページ <https://www.city.miki.lg.jp/site/mikirekishishiryokan/13387.html>)